

■事実の指摘

エズラ ヴォーゲル (Ezra Feivel Vogel) 先生は『ジャパン アズ ナンバーワン』の著者であり日本の事情に詳しい。彼は日本の大学に2つの弱点があるという。1つには国際化が遅れていること。2つ目は大学の教員が忙しすぎる事。同様の指摘が日本の大学に勤務する複数の外国人教員から寄せられている。国際化は別途に論じるとして、本稿では大学の教職員が忙しい理由を考察したい。

古井貞熙先生は2016年度の文化功労者に選ばれた音声工学の著名な学者である。古井先生はWEBZONZAで日米の大学の比較をしている¹⁾。その中で事務職員が重要であることが強調されている。

■新しい仕事が増えても古い仕事を止めない

大学の教職員が多忙である原因は複数ある。普通に「大学は教育と研究」という。この表現は二足の草鞋(わらじ)を意味する。それに加えて最近新しい企画が実行に移される。その際に古い仕事を止めれば良いのだが、実際には新旧の仕事が併存する。これでは忙しくなるのは当たり前である。

新旧の仕事が併存するのは特に大学に限った問題ではない。ただし企業では上役が部下の様子を見て担当者を増員する。あるいは古い仕事をほかに移管する。残業時間を管理するのは企業の責任である。大学を遠方から眺めれば百貨店のような組織に見えるのかもしれないが、実態は個人商店が軒を並べている商店街に近い。隣の店が火の車であつても助けが来ないかもしれない。

■良心的な大学人はオーバフローする

大学の教職員も人間であるから共通の弱点がある。ノーベル経済学賞のダニエル・カーネマン (Daniel Kahneman) 先生は著書の中で「人間の直感は統計に劣る」と指摘している²⁾。良心的な教職員は自分の能力の限界まで社会的に貢献しようとする。これは美しいことには違いないが、あいにく人間は自分の能力を

3割程度まで過大に評価するという。この弱点が厄介を招いてしまう。

筆者は後藤・野島論文³⁾の中で、人間のオーバフロー理論を論じた。その要旨は次のようである。仕事の到着をポアソン分布として平均値を λ とする。人間が指数分布に従って仕事を処理するとして平均値を μ とする。このときに重要な事実は λ と μ を等しくすると待ち行列が無限大に発散する。オペレーションズリサーチの教科書もトラフィック理論の授業でも発散する場合を取り扱わない。ところが現実人間が苦しむのは $\lambda=\mu$ の場合である。

■昼と夜に同じ仕事をするのは間違い

筆者が若い時代に勤務していた電電公社の研究所



[シニアコラム]

IT好き放題



[No.76]

大学人の勤務時間

で名物室長といわれた中村義作先生の部下になった。中村室長いわく「君の研究は成功しても失敗しても、いずれ終わる。1つの研究が終わった後に次の研究テーマを考えるのではプロとは言えない」。中村研究室長の教えは「昼間は現在の研究テーマに取り組む。夜は将来に備えて別の研究テーマを勉強する。それがプロというものだ。昼間と夜に同じ仕事をする人は、まるで所持金を一晩で使い果たす人のようだ。資金を将来に投資しない企業に未来はない。お金の例で説明すると全員が納得するのに、どうして諸君は時間を大切にしないのか。宵越しのお金を持たないのがプロといえるのか。情けないことに私は中村先生の教えを当時も現在も実践できていない。

本誌の読者諸兄が大学の弱点に十分に留意されて、時間を大切に健康第一で過ごされるように願っている。

参考文献

- 1) 古井貞熙:「忙しさ」に自滅する日本の大学, WEBZONZA, 2016年11月28日, <http://webronza.asahi.com/science/articles/2016112400003.html>
- 2) Kahneman, D. 著, 村井章子 訳: ファスト & スロー (上) あなたの意思はどのように決まるか?, ハヤカワ・ノンフィクション文庫(2014).
- 3) 後藤滋樹, 野島久雄: 人間社会の情報流通における三段構造の分析, 人工知能学会誌, 8(3), pp.348-356 (1993).
(2017年2月15日受付)

後藤滋樹 Shigeki GOTO

早稲田大学 基幹理工学部 情報理工学科

【正会員】 sgoto@waseda.jp

1971年東京大学理学部数学科卒業。1973年同大学院修士課程修了。電電公社武蔵野電気通信研究所に就職。1984～85年スタンフォード大学客員研究員。1991年工学博士(東京大学)。1996年早稲田大学教授(現職)。